

病害虫発生予報 第1号 (4月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

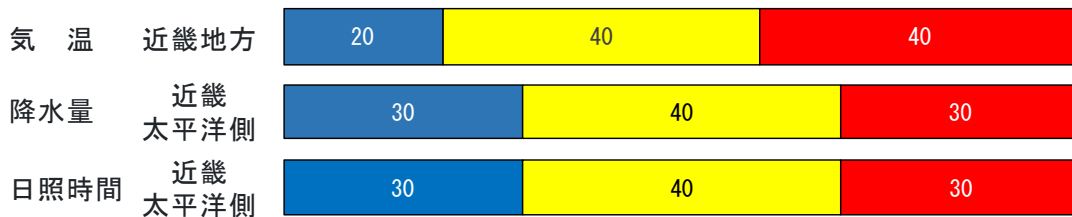
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
タマネギ	白色疫病 べと病	やや少 並	野菜全般	灰色かび病 アザミウマ類	並 やや少
エンドウ	褐紋病 うどんこ病	やや少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 ミカンハダニ	並 やや多 やや少
キャベツ	コナガ	やや少			
キュウリ	べと病 褐斑病 タバココナジラミ ミナミキイロアザミウマ	並 少 やや多 やや多	カキ	うどんこ病	少
			ウメ	かいよう病	並
			果樹全般	カメムシ類	やや少

気象予報

近畿地方 1か月予報 (03/22~04/21)

2025年03月20日14時30分 大阪管区气象台 発表		
	特に注意を要する事項	期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月 03/22~04/21	天候	近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
1週目 03/22~03/28	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目 03/29~04/04	気温	2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)



低い (少ない)
 平年並
 高い (多い)

I. 野 菜

<タマネギ>

1. 白色疫病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は3%（平成19%）、発病株率は0.0%（平成2.4%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一のほ場内でも発病に偏りがみられることがあるので、ほ場全体を見回り、発病が集中しているところは特に丁寧に薬剤散布を行う。

② 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。

2. ペト病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部での3月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は13%（平成10%）、発病株率は0.2%（平成0.1%）であった。二次感染株の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率6%、発病株率は0.1%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 前年の発生が多かったほ場では、本年も発生しやすいので注意する。

② 本病は、気温15℃前後で曇雨天が続くと多発する。

③ ほ場をこまめに見回り、越年罹病株の早期発見と抜き取りを徹底する。二次感染株を確認した場合は発病葉を除去する。抜き取った株や発病葉は袋に入れ、ほ場の外に持ち出して適切に処分する。

④ 越年罹病株や二次感染株が認められた場合は、早急に薬剤散布を行う。発生が認められないほ場においても孢子飛散による感染拡大を防ぐため、予防散布を徹底する。

⑤ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

⑥ 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。

<エンドウ>

1. 褐紋病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培における3月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率22%、発病葉率0.9%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 雨が多いと多発するので薬剤散布は早めに行う。

② 多湿条件で発病が助長されるので、排水対策や通風対策に努める。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培における3月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場

率 2%、発病葉率 0.5%) であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生初期から薬剤防除を行う。

<キャベツ>

1. コナガ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部での3月下旬の発生ほ場率は0% (平年: 発生ほ場率 3%、1株当たり発生密度 0.0頭) であった。

② フェロモントラップによる3月1~20日の誘殺数は、和歌山市2頭 (平年 23.6頭)、紀の川市2頭 (平年 5.4頭) であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ジアミド系、IGR剤などの薬剤は殺虫効果の低下が認められている。

② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は連用しない。

<キュウリ>

1. べと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培における3月中旬の発生ほ場率は33% (平年 33%)、発病葉率は5.8% (平年 6.7%) であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

② 病原菌は気孔から侵入するので、薬液は葉の表裏にムラなくかかるように散布する。

③ 肥効が低下したり草勢が衰えたりすると発病が助長されるので、適切な肥培管理に努める。

④ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤のローテーション散布を行う。

2. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培における3月中旬の発生ほ場率は0% (平年: 発生ほ場率 27%、発病葉率 4.3%) であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

② 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤のローテーション散布を行う。

③ ボスカリド剤、チオファネートメチル剤、アズキシストロピン剤に対する感受性低下菌が認められている。

3. タバココナジラミ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培における3月中旬の発生ほ場率は55% (平年 38%)、

生息葉率は 11.3%（平成 3.9%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① タバココナジラミはウリ類退緑黄化ウイルスを媒介する。

② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

4. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培における3月中旬の発生ほ場率は36%（平成18%）、生息葉率は0.5%（平成1.3%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温の上昇とともに発生が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

③ ミナミキイロアザミウマは、メロン黄化えそウイルス（キュウリ黄化えそ病）を媒介する。

<野菜全般>

1. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は8%（平成2%）であった。

② 県中部の施設栽培ミニトマトでの3月中旬の発生ほ場率は0%（平成3%）であった。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設の湿度低下を図り、過灌水や滞水しないように注意する。

② 発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。

③ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤のローテーション散布を行う。

2. アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマを除く）

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培イチゴでの3月中旬の発生ほ場率は、ヒラズハナアザミウマ0%（過去9年の平均12%）、ミカンキイロアザミウマ0%（平成1%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は、ミカンキイロアザミウマ0%（平成3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温の上昇とともに発生が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

II. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

- (1) 予報内容 発生時期 並
発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）の3月中旬における春葉の越冬病斑の発病葉率は6.7%（平年9.2%）であった。
- ② 前年10月中旬の県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における春葉発病の発生ほ場率は25%（平年19%）、発病葉率は1.2%（平年0.5%）であった。
- ③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 罹病性品種植栽ほ場や常発ほ場では、伝染源となる罹病枝葉の剪除や防風施設の整備に努めるとともに、新梢伸長期に銅水和剤（葉害軽減のための措置を講じる）を散布する。

2. そうか病

- (1) 予報内容 発生時期 並
発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 前年8月中旬の県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）におけるウンシュウミカンの果実発病の発生ほ場率は18%（平年8%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 常発ほ場や前年多発ほ場では、伝染源となる罹病葉の除去、発芽直後の薬剤防除に努める。
- ② 令和6年度病害虫防除技術情報第5号（令和7年3月10日発表）を参照する。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（有田川町奥）における3月中旬の発生葉率は、無防除区0%（平年5.0%）、マシン油乳剤を散布している慣行防除区0%（平年0%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミカンハダニの防除は、12月下旬～1月上旬または3月中下旬、6月下旬のマシン油乳剤の散布、9月の化学合成殺ダニ剤の散布を基本とする。
- ② 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は年間に2回以上使用しない。

<カキ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月中旬の「富有」の発生ほ場率は44%（平年71%）、発病葉率は2.4%（平年13.8%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発したほ場では、この時期の防除を徹底する。
- ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
- ③ 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬液は葉裏をねらって丁寧に散布する。

＜ウ　　メ＞

1. かいよう病

(1) 予報内容　　発生量　並

(2) 予報の根拠

- ① 3月中旬の予察ほ場（無防除、みなべ町東本庄）での2年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は0%（過去8年の平均0.9%）であった。
- ② 県南部（みなべ町、田辺市）の前年6月上旬の発生ほ場率は41%（平年46%）、発病果率は1.2%（平年1.8%）であった。
- ③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 強風雨により感染が助長されるため、常発園では防風施設の整備等の防風対策を励行する。
- ② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回、抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

＜果樹全般＞

1. カメムシ類

(1) 予報内容　　発生量　やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は落葉50リットル当たり0.2頭（前年2.9頭、平年0.6頭）、捕獲地点率は14.9%（前年48.9%、平年21.7%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量はほ場間差が大きいので、ほ場内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② 山林に隣接するほ場はカメムシ類の飛来時期が早いので、ほ場内での発生状況を観察して早めに防除する。
- ③ ウメでは被害の品種間差が大きく、小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、特に注意が必要である。
- ④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害状況を観察して防除する。
- ⑤ 今後の発生動向については、鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○鳥獣害対策課ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/072000/d00216368.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780